

‘呪われた血’の叛逆詩人 (14)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第十二章 ギリシャ遠征の壮途へ

本稿のテーマは

——バイロンが自己の生命を凝視^{いのち みつめ}て、死期の迫ったことを予知し、自己の使命
を自覚し、自己の‘完成’^{こんぐ}を欣求し、ギリシャ遠征の壮途につく、その道行^{みちゆき}を
究めること——

である。

Sons of the Greeks, arise !

ギリシャの児らよ、起^たて！

叛逆詩人、熱血詩人、義を愛し、義に殉じたバイロン卿は今、一点を凝視し
ていた。

あふ
溢れるばかりのロマンチズムの新星として19世紀初頭、英国の詩界に突如、
ハレー慧星の如く出現したバイロンは——

石をもて 追はるる如く ふるさとを 出でしかなしみ 消ゆるときなし

と本邦の詩人啄木がうたった如き単なる感傷の詩人ではなかった。

Byronは妥協をきらった！

Byron詩はモラルを、うたった。

人間の、かくあるべきモラルをうたった！

Byronは、悪魔の力を借りてまで、真のモラルとは何かを追求した。それが Byronの詩であった。

Perfection ‘完成’こそ自分の生きるところであり、死がその出^{かど}発であり、追放された祖国こそ、Greenest Island ‘完成の国’であり、そこで永遠に眠りたいと希求した。

今、バイロンの凝視するものは——死の世界において‘自分の坐るべき最高[・]の[・]坐[・]’であった！

高潔な詩人Byronの埋葬安置を、WertminsterのPoet's Cornerは拒否した、という。死後百年余にして、今、そこにByronはしかし安置されている！

John Bull 気質に終始したByron卿にとってそれは、この反逆詩人へのJohn Bullの皮肉な、そして最高の処遇であった！
とまれ——

死期をみつめるByron卿に、いま、二つの思いが集結していた。

Lady Blessingtonに書き送った。

‘自分の天職は詩人である。だが詩人が世に貢献するところは微少である。そうであるならば詩人としてのみ[・]生[・]きる[・]ことより、身をもって私は軍人、戦士となるべく必生の力と勇気をもって闘う……’とその決意をのべた。

それは、ギリシャ独立軍を指揮する決意、これが自分の最後の、この世の使命であり、ギリシャ独立運動に殉ずることへの固い決意の表明であった。

ギリシャ独立運動に身を挺すべく Byron は 1823 年春、ギリシャへ発つ決意を固めていた。

それは——最高の死地を求める、Byron の崇高な心境であった。

苦闘するギリシャ愛国者たちを支援すべく、結成されたばかりの the London Greek Committee から派遣された代表が Alvaro に Byron を訪れた。

Edward Blaquiere という、精力的に、奔走する、若きアイルランドの活動家で、彼は、1822 年のスペインの合憲蜂起運動のこともつぶさにしらべていた。そして、これが Bourbon France によって鎮圧されるや否や彼は直ちにギリシャへと注意をむけた。

the London Committee の Blaquiere's Whig and Radical の中には Byron の親友 John Cam Hobhouse もいた。

Blaquiere とともに、ギリシャ政府代表の Andreas Lurcott も訪ねてきた。

Byron の心は、奮い立ち、いま、燃えたつた。“ギリシャよ、起て！”と叫んだ。そして、この要請にこたえて、

“もしギリシャの、この暫定的政府が、私を必要とし、そして、私がすこしでも役に立つことができれば……”と快諾の意中をつたえた。

Pietro Gamba も同様に、今、革命の同志として燃えたち、彼の心は、はや、ギリシャ独立の日の栄光を夢見つつあった。

最愛の妻 Annabella が、最愛の祖国英国が、バイロンに永久祖国追放を宣言した！！

追放の身を、流浪の身を、感傷をうたわず、自己の所信を臆することなく昂然と眉をあげて、血を吐きながらも、うたいつづけた！

正義とは何か、モラルとは何か？と。

思えば——

祖国追放後、バイロンはつねに颱風の目であった。

Shelleyとの親交の中にスイス旋風、Guichori伯爵夫人Teresaとの、最後の樂園の中にイタリア旋風は巻きおこった、渦巻はぐるぐると巻きおこった、激しく強く律動的に！

最初Byronの想いはギリシャへの支援、すなわち、軍資金、弾薬、医薬品などのことにかけてめぐった。そして、ギリシャ独立運動に私財を投じる決意のゆえに、Byronは冗費を節約することで昨年の収入の中から3000パウンドが、そのために蓄財されていた。

Byronの頭の中では双方の側の野蓄性残忍性を減じることによる、博愛主義的考、人道主義的考が展^{ひろ}がりゆきつつあった。

このギリシャ独立戦争の最初の年に2000人のギリシャ軍と2000人のトルコ軍が大量虐殺された。

5月までにはByronの希望は大きく、ふくらみゆき いまや高く飛翔しつつあった。

5月12日——Byronは

London CommitteeのsecretaryであるJohn Bowringから、Byronが、この

committeeの一員として推挙された旨の手紙をうけとった。

Bowringは、旅行家、学者、財政家として大英帝国の国威宣揚の途上にあったVictoria王朝に貢献した典型的人物であった。

Byronは——Bowringの招待をうけて、折返し返事をかき送って、委員会宛に、ギリシヤに関する諸のアドヴァイス^{もろもろ}を報じた。Byronは当時、PisaのNicholas Karvellasともまた絶えず接触をもっていた。

もしも国際的軍団が結成されることになれば、士官たちは、絶対に、ピフテ[・]キとワイン[・]のことで不自由な思いをすることがあってはならない旨を強調した。

ギリシヤは今、困窮していた。貧のどん底にあった。

他方、しかし、ギリシヤのワインやオイルの生産的潜在力は、英国民が、それを求めているthe CapeやVan Diemen's Landや、海外の其他の土地のそれらにくらべ遙かにこれをしのぐものがあった。

これらの情報を詳に^{つばさ}Byronは委員会に伝えた。

熱血ほとばしるByronにとって今をときめく英国外相George Canningこそ、たちまち彼の心を射とめるのに十分な、まさに心酔する人物となった。

George Canningは、かの悪徳漢、圧政者Lord Castlereaghの自殺——1822年——以来、英国外交政策の立役者たる要職にあった。

英国対米政策の重要な一環として、Canningは新しい南アフリカ共和国を公認することを切望する人物であった。

Byronは、やがて、ギリシヤに到達したとき、一友人にむかって、このように語るようになった。

“Canning卿こそ、やがて、ギリシヤ独立のため、多大の盡力を惜しまざる、

絶大な貢献を果してくれる偉大な人物であろう。

私は彼が、いつまでも、その外相の要職にあり続けることを心から祈り願うものである。偉大な組織的英国の権力、偉大な英国の創意が必ずや、彼に、世界にむかって君臨する支配力を賦与するであろう！”

ByronのCanningへの信頼感は絶大なものであり、尽きるところのないものであった。

その前年、ギリシヤで潰滅^{かいめつ}した、若きドイツ人の結成したギリシヤ愛国党の、残存者たちは、Casa Saluzzoで、この威大なByron卿に接触する機会をもつことができた。

この接触は、ますます、Byronの熱血をたぎらせ、さらに、Byronの、そのための援助、出費もましていった。

たしかに、以前の、ドイツ、スイスにおける対ギリシヤ援助委員会が失敗に帰したといえども、どちらも、立派な、緻密^{ちみつ}な組織をもつものであった、という事実——の中に将来への不吉な前兆をByronは今、すこしも見出しえなかった。

そして——Byron自身による強化された組織もまた、これに先立ち、すでに、発足していた。

同志、Pietro GambaはもちろんByronと行を共にした。そして若いイタリア人医師Francesco Brunoも今や健康にすぐれぬByronの侍医として同行した。Byronはこの若き医師を高く評価し絶大な信頼をおいていた。

Byronにとって侍医を同行させることは今や必須のことであったのである。というのはそれぞれ Viareggio と Lerici における激しい水泳のため消化不良と胃の衰弱になやみその後の diet のゆえに1812年にはすっかりやせ衰え、それも transparent な繊細^{せんさい}な骨肉の瘦軀^{そうく}、蹠跟^{そうろう}の身体^{からだ}となっていたから。

Lady BlessingtonもByronの影のうすい、弱々しい瘦軀^{そうく}には、とても、驚き一見して、ギリシヤ遠征が全く無謀の挙であると感じたほどであった。

さらに——

Byronの神経組織も多少錯乱しているように思われるふしぶしもあった。

躁^{そう}と鬱^{うつ}の状態がこもごもゆきつもどりつ、くりかえし、きわめて沈みこむ波長と急にとつぴな陽気な、はしゃぎに心おどり、次の瞬間また得^え体^{たい}のしれぬ悲しみにかえてゆくその推移にみづからの波長をあわせることができずByron自身どうしようもなく心は乱れ錯乱した。

Dr Brunoとしてもこのような複雑な患者の病状をうまく処理すべき術^{すべ}もなく困り果て、まったくお手上げの状態だった。

Dr BrunoはByronより100パウンドを支給されたが同居はしなかった。このようなことはその当時としては全くの異例のことで別格待遇であったが実は——Byronの気性の激しさ癩^{れび}性の強さにDr Brunoが怖れ不安を感じ、もし、いささかでもまちがった処置をすれば、Byronの犬が彼の五体をすぐにでも、ズタズタに引裂くことになるであろうとのByronの、おどけた威嚇^{いこく}に怖れをなしたことは事実であった。

この二匹の猛々しい獵犬はブルドッグのMorettoと、この年5月にByronに贈られたLyonという名のニューフワウンドランド犬であった。

Byronは執心のあまりこのLyonを、やがて甲板長に仕立てたほどであった。

また5頭の馬を乗船させた。そのうち、4頭はByronの跛行のゆえに是非とも必要なものであった。

8人の召使も同行した。——その中にはstewardのLega Zambelli、そしてstatus symbolとしてTre lawnyから買った黒人のTita、そして、あの、今は老いたる、ギリシャのことは知りつくした忠僕Fletcherもいた。そして——

彼等を支配し、取締ったのはRobert Scott船長の愛犬、今は老いたseadogであった。そしてこのRobert Scott船長は、毎日、ジャマイカ産ラム酒をひと盞^{びん}飲み乾したが、航海中、酩酊^{めいてい}することは、しかし、絶対なかった。

Byronは彼の傭ったこの野人に400ギニーのpayを払うようにとの、Lord

Blessingtonの申し出をことわることはできなかった。そしてそれゆえにギリシヤへむかうこのbrig船, Captain ScottのあやつるHercules号をチャーターしなければならなかった。そして2台の大砲がBoliver号からHercules号のデッキへと移された。Hercules号の伝統的、権威ある名前にふさわしいHomer風のヘルメットを3つ、オーダーしてつくらせた

当代の伝記作家 Thomas Moore は、少年の頃、Byron が‘Byron’s Blacks’—バイロン黒衣隊—と呼ばれる黒い甲冑^{かつちゆう}の騎兵隊を募ることを夢みたことを指摘して、このヘルメットが、かきたてるであろう嘲笑をはねつけようとした。

Mooreはさらに一言つけ加えた。

‘このByronのオーダーしたヘルメットはすでに、Waterlooの古戦場に使用したもので決して珍奇なものではなくてギリシヤ軍の指揮者Hypsilantesは髑髏^{しやりこうべ}の下に‘Liberty or Death’——“自由か死か” のモットーを記したdashing black hatを着用した軍団を募ったのだ’と。

Byronのオーダーしたヘルメットは——

Pietro用に、緑色のアテネの人物を描いたshakoであり、

他の2つはHomer風の、金メッキをほどこした冠毛をつけたもので、1つはCrede Byron——と銘うったものであり、Byron自身用に、もう1つは、Trelawny 用のものであった。

Corsair Trelawnyも——

6月にこのギリシヤ遠征軍に参加すべく招待されていた。

TrelawnyはLeghornのthe Bolivierのbuilder宛に書き送ってその拳を祝福した。

‘Byron卿と私は、格別に親密な仲なのです。我々の間柄は、切り離すことの出来ない程に心を一にする同志なのです。そして私は全く彼に負担をかけるこ

となく自分自身奮闘努力して自分自身の経済的準備もしてきたのです。’と。

Corsair Trelawnyは事実、ギリシヤにおもむいたときみづから独立独歩の道をきりひらいてゆきByronの経済的足手まといにならぬよう、負担をかけぬよう心の準備、経済的準備をすでに用意してこの遠征に加わるべく覚悟を決めていたがByronは、彼に遠征のための旅費はこれを支払い、彼の決意に報いた。TrelawnyがByronから一行に加わるべく誘いをうけていたためである。

ByronはTrelawnyを誘った。

‘僕がギリシヤにおもむこうとしていることを君はきいたにちがいない。どうだ！僕といっしょに来ないか。’と。

Teresaの場合——

いつまでもいのちをかけてよりそっていたい、とのみ、そのことをのみ今はひたすらに思い恋慕うTeresaの心情を思うときこの同じ質問が、要請が、もし彼女にむかって問われることがあったならば……

Byronは彼女を憐れむいつくしみの情からも複雑な想いゆえにこの遠征の意中を彼女にもらすことをしなかった。

それは——彼女が袂別^{わかれ}を絶対に許さぬ心情ゆえにその愁歎場を必ずや演ずるであろうことを、そして、かつて経験した如く、それゆえに、また、ギリシヤ遠征の拳を断念しなければならぬであろうことを怖れたがゆえであった。

だから——

妹おもしろい、彼女の兄Pietroがこの、Byronの意中を彼女にあかしたとき彼女の苦悩はByronの予想どおり、まさに、筆舌につくし難いほど大きいものであつ

た。彼女は、愛人Byronが二度と自分のもとに帰る日は決してないことをはっきりと予見していたからである。

Byron詩に登場するHeroは、軍人詩人が変形されてしきりに現れるが女性に対してデリカシー、女々しさを絶対、示すことはしないのである。

Byronic Heroはロマンチックに女性を愛しえても悲劇的に女性をすてることができたのである。だが、その中間的感受性のゆえに、広がりゆく幻影のゆえに、つねになやみ、倦怠を感じるのである。

だからたとえば、あの、two N. B. s——Noel ByronとNapoleon Bonaparte——は、好ましく、そう考えた如く、‘女には鏡と砂糖づけを与えておけば満足する’といった存在でない場合、その女性は、何という不幸な存在としてその生涯を果てたことであろう。

Mary Shelley——Shelleyの未亡人——との袂別もByronにとって、今は、苦痛にみちたものであった。祖父Sir Timothy Shellyが死んだとき、彼女の息子Percyは莫大な遺産のゆえに大金持になるのであるが彼女、Mrs Shelleyは今、英国へ帰国の船賃にさえもことかく貧しさを、窮状を歎つ身であった。

2000パウンドの額がかつてByronに——彼のexcutors遺言執行者の一人として——委ねられていた。

もちろん、ByronはMaryが必要な出費にはこと欠かぬよう配慮することを、彼女に約束した。しかし、Byron自身の先入観や優柔不断のゆえにMaryに対するLeigh Huntによるへまな言動を誘発しやがてByronは癩癪をおこし激怒する結果となった。

ByronはHunt宛に手紙をかきその怒りを爆発させた。Huntはその手紙を受

け取りその怒りがゆえなく異常だとうけ留めた。

しかし――

Byronの怒りがやがて鎮まりおさまったときまでにはMaryはTrelawnyに好意をよせたがゆえにByronの援助を断っていた。

Byronが今、Shelleyの遺贈をぶっきらぼうに断り^{ことわ}困窮しているHuntに30パウンドを与え、彼と彼の‘kraal’をFlorenceに行かせることはほとんど、償いをする^{こと}にはならなかった。

極度の儉約ゆえにByronの行為はこれまでしばしば批難の的となってきたが、事実彼はいつもの、例の、悪魔的怒りとエゴイズムのゆえにしばしば数多くの、あやまちを犯してきたのである。

Byronは今、――

最愛の人、Teresaとの最後の、ひととき、をもつことは避けることはできなかった。7月13日午後3時から5時まで、荒涼たるCasa Saluzzoにおいて彼女とぐづつくーときを無為に過した。

それからTeresaは傷心の身を――父がそうすることを許した――the Romagnaへと帰っていった。

そして――彼女の最愛の人Byronはその晩、ギリシャへ向う船へ乗り込んだのである。

Teresaは――これに先立ち、Byronがギリシャにて今後、女性関係のことはどう成り行くかをいく人かの友にいろいろと尋ねたことについてはもちろん知るよしもなかった。

13日、その夜の、この静寂さは！ ByronにとってTeresaとの不運なわびしい訣別の、この最後のdateでの、黙してことばなき立往生は、耐えがたい、そしてどうする術^{すべ}もないものであった。

Byronは翌日——

Pietro GambaそしてTrelawnyと共にSestriのVilla Lomellinaの庭での、fruitsとcheeseでのdinner partyのため引き返さねばならなかった。——このvillaは今ではもう去っていったBlessington夫妻の滞在していた別荘だったが……

船内でふたたび眠ったのちも——15日、船出のための良き兆しは、好転の兆しは、気配は、いっこうに見られなかった。

突然の強風は夜通し彼らをうちのめす如く吹き荒れて彼らの老朽した船は、不運にも港へと吹き返され船内の、うすっぺらな仕切り壁は怖れおののく馬によって蹴破られてしまった。

Byronは——

‘この悪天候の中で全員が夜通し閉ぢ込められ全くなす術もな^{すべ}なかった。’とAugustaにそのときの様子を書き送った。

乗客たちは船酔いに苦しみつづけた。‘今まで歩きつづけてきた“悲しきそしていとも厳肅な巡礼の旅” ゆえにかくの如きあわれな人間性をむき出しにされてもそこに多少とも勇気づけてくれるものがなきにしもあらず’とTrelawnyはこの惨状を述べている。

16日——Trelawnyは

終日船の修復作業をかんたくした。そしてByronとPietroは出航前にひとけのないCasa Saluzzoを再度訪問した。

ものおもいに沈んで独白する如きムードで、ありし日を偲びつつ懐旧の情にひたっていた。

“あと1年後には我々は果して何処にいるのだろうか？”

奇しくもそれから1年後のまさにこの日——Pietroがのちに気づき、したためたのだが——実にこの日こそ、Byronが死出の旅路へとおもむいた日なのであった。

しかし——21日、
一行がLeghornに着くや否や事情は好転し不死鳥Byronにとって吉兆がほの見えてき始めたのである。

24日——一行がふたたび出航しようとした、まさにそのときByronは、あの偉大なGoethe彼みずからの、直筆の献詩を手渡された。そしてGoetheはByronに、

‘あなたこそ時代が生んだ天才である’と絶大な讃辞を贈った。

そしてByronはこれにこたえて、Goetheに“Sadanapalus”を献げた。しかしMurrayへのByronのこの手交手続への指令があまりにも手遅れとなったのは遺憾だったが、Byronは1822年、his Werner (a Gothic drama of few attractions)をもって見事、成功をおさめた。その名誉を讃えGoetheはByronに対する絶大な親交の好意、友情をこめてドイツ語の3篇の詩を贈って報いている。

それは次の詩行ではじまるものであった。

A friendly word comes!

‘親しきことばがやってきた!’

ボーツとした気持でByronはその詩に魅せられつつこれにこたえた。

‘Goetheみづからの筆跡でかかれたこのひとことほどより嬉しい、おどろき、そして吉兆を感じた経験はいままでに私のもちえなかったことである’と。

Byronは今、Goetheに対し心躍る友情をしみじみと^{よろこ}び味いえたのである。

Leghornからの吉報はしかし現実的には‘favourable’というよりもどちらかといえばmixedされた複雑なものだった。

彼らの一行に加わったJames Hamilton Browneという若きScotはRomanic語を話し、あまりにもギリシヤ愛の精神にもえるあまり英国兵役における彼の職を失うことになった青年である。

しかし――

Byronがにぎやかなこの海港で会った種々さまざまなギリシヤ人たちはそれとなくお互にバラバラであるものとしてなんとなくByronの心に訴えるものがあつた。

彼らがギリシヤ民族としてのまとまり、一致団結に、欠けていることへのひとつの証^{あかし}としてByronがこれをもったのはByronが2人のギリシヤ人から彼らのnative landへむかう、Hercules号に、無賃で乗船させてくれないかとの申し出を受けたときのことである。

彼らの一人Prince Skilitzyは同胞からロシヤ人スパイだと報じられており、いま一人Captain Vitaliはトルコ人に雇傭されているのだと報じられていた。

Leghornから出航してPietroからTeresa宛の手紙の中にByronはp.s.追伸として英文でつけ加えた。

Teressaは愛人Byronからの、その、英文で書かれたp. s.を理解するのに十分な英語を学んでいなかったことを、今は、もはや手おくれとなったことをどんなにかうらみに思い、悲しんだことだろう。

‘愛^{いと}しいTeressaよ！ 僕は今、君に、みんな元気だと、つたえるわづかな時間しかのこされていない、だが、このようにしてはるばるとthe Levantへこれからむかうのです。だが、信じてくれ！ いつまでも僕が君を愛していることを、そしていつもかわらぬ愛を君に捧げることが。僕の心と僕のことばの万分の一もつたえ得ないのが残念だ。つねに変らぬ君の最愛の人、N. B.より、心をこめて。’

かわいそうにTeresaは——

Byronの愛のところがp. s.の手短かなことばの中に万感のおもいとしてこめられていることがもしもはっきりとつたわりさえしえたらな—と、今、私達は、二人のために心の通いあうことを祈りたい気持である。

Teresaは——Byronにとって

Byronの短かった生涯の中で、最後の、そして彼が最も愛した女性であった。

Byronが生涯中愛した女性は星の数ほど多い。

詩人Byronは偽らざる^{いつわ}ところを大切に、その瞬間々々の^{こころ}に忠実に生きた詩人である。その^{こころ}の瞬間の流露が万卷の詩集として不朽の名詩として幾世代を経て、今、なお、われわれの心に訴える。

本邦の詩人、啄木が短詩型^のを定義して述べたことばは、意義深い。

‘人、それぞれの、その心の瞬間の感動は、人生において最も貴重な感動であり、二度と、ふたたび、現れることは絶対にないのである。その^{怒り}、^{悲しみ}、^{驚き}、^{よろこ}び、の感動をうったえる記録こそ、うた——^{うつつたう}訴=詩——なのである。’
と

Byron詩の場合——

まさにその通りであった。Byronはその意味においてまさに^{投影}詩人であった。Byronは自分の詩を推稿することを絶対しなかったし、推稿を極度にきらった。なぜならば——

‘推稿は、そのときの感動を必ず^{げんさい}滅殺してしまうであろうから’と云った。

Byronにとって、女性愛の場合——もそうであった。Byronは数多くの女性を

心から真剣に愛した。その、いづれの場合も、その瞬間の愛の記録はByron詩の中で燦然と光り輝くものである。しかし——その愛がByronの場合、永く続いたものはひとつとしてないのである。

コロコロとコロガリ移りゆくものが、変りゆくものが、生きたココロの流露が、愛であるならば永遠の愛はあり得ないのが、きわめて自然であり当然であろう。AがBを愛し得ても、次の瞬間、A'がB'を愛することに変貌しているのであり、永遠の愛につながることにほなり得ないだろうから。

だから——

Byronの愛した星ふる数ほど多き女性の中でただひとりとして永遠の愛のちぎりを祝福されて生涯を果てた女性はなかったのである。それは事実である。

しかし——

その瞬間、瞬間、Byronから真剣に愛された女性はみな幸^{しあわせ}だった。それも事実である。

Don Juanの作品をもって世人はByronを当代、一流の、Madam Killerマダム キラーの如く呼ぶものもある。

しかし、Byronがplay-boyプレーボーイ的、poserであるはずはなかった。これは真実である。

耐えることをつねに強いられ、不運の星の下に生^あれ、育^おいたちし、風見鳥、Byronは女性なしでは生きることができない宿命を背負っていた。その意味でByronは、数多くの女性との交情においてその瞬間々々をつねに真剣に愛し恋し、自己を偽らず真実を貫いた。

Teresaの場合——Byronにとってこの女性こそ、最後の、そして、最高の、

最愛の、理想の女性であったことは、事実だった。

Teresaはblue-stocking知性派の女性としてByronにとってよき文学的助言者であったとしても、——離別して生涯、同居を拒否しつづけた——妻Anabelaの如き冷いblue stockingではなく、そして——姉としてByronが生涯慕い続けた——Augustaの優^{やさ}しさをもち、さらに、——Byronとの恋にいのちをかけた情熱的、才色兼備の女性、理想の、最高の、女性であったがゆえに、ByronがTeresaと情を交した最後の月日こそ、Byronにとって、それが、この世の最後の樂園、Edenの園に幸^{しあわせ}を窮めた、密月の、みちたりた、月日だったのである。しかし

Byronの場合——今、

Teresaとの愛にすこしでも翳^{かげ}りが生じたのであろうか？

何故にByronは袂別へと踏みきったのであろうか？

Byronはいま、断腸のおもいに、かられつつ悶えた。熱愛するTeresaをみづからの手で不幸の深淵にたたき落す冷酷さをもち得たのであろうか。

ギリシヤが彼を招いた！ 神がByronを招いた！ Byronは英雄詩人として、この世を果つるべき自己の天命を神の命を厳しく自覚した。そして、それゆえにこそ、Teresaをより深く愛して、自分の胸中を、秘事^{ひみつごと}としてTeresaに明かし得なかったのである。

義に殉ずるByronの心に——自分の死期をはっきりと予知し得たとき——それゆえにこそ、みづからの心に忠実にみづからの手でCast a die！‘賽^{さい}を投げた’のである。Byronは勇者だった！自分の天職を知った、天命にしたがった、真の英雄だった！人間である前に、自分の使命を自覚して、ためらうことなく、自

分のすすむべき道を選んで、ギリシヤ遠征の壮途に！

自分でもはっきりと予知しえたこと——それは、今、自分のいのちの^{ほむら}炎が消えようとするとき！

完成を希求するゆえに、この世を生きた証^{あかし}を求めて、複雑な思いでTeresaとの袂別に悶えつつ心は乱れつつ、ひたすらに自己浄化^{ごんご}を欣求してギリシヤ遠征の壮途についた。

勇者Byronの心境は、いま、しさがに[・]厳肅な、求道一路、神に近づきゆかんとするものであった。彼岸にて最高[・]の坐につかんとする、ひたすらにそれを^{ごん}欣求する清澄な心境であった！

こころは一路ギリシヤへ！

懐しい友よ！ 最愛のTeresaよ！ さらば！

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.